

日本語教科書における「修復」の扱われ方
—タスク内での役割—

山崎 けい子・初鹿野 阿れ

富山大学人文学部紀要第57号抜刷

2012年8月

日本語教科書における「修復」の扱われ方

—タスク内での役割—

山崎 けい子・初鹿野 阿れ

キーワード：修復 自己開始 他者開始 日本語教科書 タスク 役割

1. はじめに

日本語学習者が日本語で会話を行うには、様々な問題が起こる。例えば、自分が言いたいことが言えない、相手の言ったことが聞き取れない、理解できない、などである。それらは日本語母語話者にも起こり得ることであるが、特に日本語学習者にとって、このようなコミュニケーション上のトラブルへの対処のプロセス、つまり「修復」のプロセスを明らかにすることは、適切な問題対処法を学ぶ上で重要である。

しかしながら、会話における「修復」のプロセスをどのように日本語学習者に示し得るか、学習者がどのように学び得るかという点においては議論の余地がある。そのような微細なプロセスは実際の会話の中で自然習得されるものだという考え方がある。一方、より現実に近い会話例を教材として示しながらその詳細なやりとりを焦点を当て示していくことが可能だという主張もある。もちろん二項対立の議論ではなからうが、本稿では手始めとして後者の立場に立ち、どのように「修復」のプロセスを教材の中で示し得るのか、その可能性を探りたい。そのために、まず、既存の日本語教科書の聴解教材などにおいて実際に「修復」をどのように扱っているかを調べ、その傾向を明らかにする。それを踏まえ「修復」のタスク内での役割を考察し、今後の方向性を探る。

2. 会話分析における「修復」と本研究の範囲

会話分析における「修復 (repair)」とは、会話において発話、聞き取り、理解に何らかの問題が起こった時、それを解決するために話し手と聞き手によってとられる一連の手続きである (Schegloff, et al., 1977)。以下、Schegloff, et al. (1977) を参照しながら、説明をまとめる。

「修復」と同義と混同されがちな「訂正 (correction)」は、間違った発言を正しいものに置き換えることである。以下は訂正の例 (筆者作成) である。

① A: きのう図書館に行ったよね

→ B: おとといでしょ

「きのう」という発話の間違いを「おととい」に置き換えている。しかしながら、発話に間違いはなくとも、発話、聴き取り、理解に問題は起こり得る。例えば、相手の言っていることが何らかの理由でよく聞き取れない場合、「ん？」などと聞き返すことがある。このような現象を含めたより幅広い領域の現象が「修復」と呼ばれている。

2.1 自己修復・他者修復

修復は、発話、聞き取り、理解に何らかの問題が起こっている箇所「トラブルソース」に対して行われる。修復には、トラブルソースの話し手が自ら修復を行う自己修復と、聞き手が行う他者修復がある。また、自己修復は他者修復に優先すると言う。

例（筆者作成）でみてみよう。修復の連鎖には、問題の源である「トラブルソース」があり、何らかの表現で「修復の開始」があり、トラブルの解決するための「修復」そのものがある。

②自己修復例

A：明日 チョコレート買って来てね：

→B：なに？

A：チョコレート. 買って来てね：

Aのチョコレートがトラブルソースとなり、聞き取れなかった、あるいは理解出来なかったBは、なに？で修復を開始している。それに対して、トラブルソースの発話者であるA自身がチョコレートと修復している。A自身が行う自己修復例である。

③他者修復例

A：明日 チョコ買って来てね：

→B：ん？ チョコレート.

A：買って来てね：

Aのチョコというトラブルソースに、聞き手であるBは、ん？で、聞き取れなかった、理解出来なかったことを表し、修復を開始している。また直後に、チョコレートとAの発話の修復を行っている。Aではない、他者が行う他者修復例である。

一般的に、会話の内容を一番よく知っているのは発話している本人である。自分自身が修復する権利を優先的に持つとするのが普通であろう。本稿ではこの優先的とされる自己修復に着目する。

2.2 自己開始・他者開始

さらに加えて、自己修復には、自己開始修復と他者開始修復がある。

自己開始修復とは、例えば以下のような例（筆者作成）である。

④自己開始（自己）修復例

→A：昨日、食べ、あいや、飲みに行ったんだよね

このように、トラブルソースの話し手が自分で修復を開始するものである。

また、先に上げた②は他者開始（自己）修復の例である。

他者開始の修復開始の方法として以下の5つがあると言われている。

〈1〉 えっ？ん？

トラブルソースを限定しないで、「えっ？」「ん？」などで聞き返す方法

〈2〉 疑問詞のみ

どこ、だれ、なに、などトラブルソースを疑問詞に置き換えて聞き返す方法

〈3〉 なに本？誰ゼミ？

分からなかった句の一部分を疑問詞に置き換えて聞き返す方法

〈4〉 単純な繰り返し

トラブルソースを単純に繰り返して聞き返す方法

〈5〉 ～って～ってこと？

トラブルソースに対する修復例を提示して聞き返す方法

本稿では、これら自己開始（自己）修復と他者開始（自己）修復の両方を分析の対象とする。

尚、ここでは単純化する為に作例で示したが、会話分析という分野で明らかにされてきた「修復」とは、会話参加者の相互行為のひとつであり、本来「修復」の分析は、録音、録画された実際のやり取りのデータを基に行うべきものである。参加者の表情、言葉のイントネーションやポーズ、前後のやり取りをすべて観察し、分析をする必要がある。

しかしながら、本稿では学習への応用を考えるために、教材で使われている「作られた会話」、つまり自然に行われたやり取りではない会話をあえて「修復」という観点から分析したいと考えている。それにより教科書で扱われている「修復」のたまかな特徴を明らかにすることは、日本語教材の現状を把握する上で有意義であると考えられるからである。

本研究では、本稿とは別に、実際の、非母語話者を交えた自然会話における修復の分析も進めているが、その詳細は他稿を待たれたい。

3. 日本語教材に現れる自己修復

3.1 調査の方法

日本語学習用教材から、初級及び初中級者向けの、学習者が耳で聴くこと重視されている教材¹⁾を選び調査対象とした。初級及び初中級者向けを扱った理由は、学習者が一番聴き取りや理解、発話のトラブルを抱え、その対処に困難を感じる段階であると考えたからである。対象としたのは、より自然な会話を取り入れていると思われた『日本語生中継 初中級編1』、『日本語生中継 初中級編2』、『J-BRIGE For Beginners Vol.1』である。いずれも音声教材が用意されている。その中のモデル会話や練習会話から自己修復例を収集し、分析した。

3.2 調査結果の概要

今回の調査の結果、自己開始自己修復と分類されたものは僅か1例だった。他者開始修復と分類されたものは、約10例程であった。その他、自然会話ではないので本当に修復であるのかの判定が難しい²⁾ものが多数あった。

3.3 自己開始修自己復例とタスク上の役割

自己開始自己修復の例をみてみよう。

☆【教材会話例①】

健二：俺、ブラジル料理食べるの、今日が初めてなんだ。

リサ：あ、そうなんだ。

健二：うん。

リサ：最近、けっこうこの辺にブラジルのお店、できているよ。

健二：うん、気になってたんだけどさー。なんか、一人じゃ入りにくいしさー。

リサ：あ、そっか。じゃ、よかったね。今日は私といっしょで。

→健二：うん。な、これ、このフェジョア、フェジョアードって何？

リサ：フェジョアード。豆の料理だよ。茶色い豆と豚肉とかが入ってて、煮込んであるの。

ブラジルの代表的な料理だよ。

1) 聴解教材を中心に調べたのは、会話の中で、「分からない」ということは状況や場面に依存するものであり、聴解の中で、状況や場面とともに自然にながれを学ぶことが望ましいのではないかと考えているためである。

2) 実際の会話には、言葉のイントネーションやポーズ、言いよどみ等音声からの、また、視線、表情、身体の向きや動き等の非言語行動からの、前後のやり取りの豊かな情報があるが、それらがモデル会話では簡略化されている為、修復と判定するだけの根拠が不足している。

(本稿での考察からは外れるため、以下省略)

(『日本語生中継 初中級編1』 第3課より)

メニューを見ながらの会話であろうが、健二は → の部分で、初めての言いにくい単語を発音することに困難を感じている。そして、下線部分のトラブルについて、二重下線部分で自ら修復を行っている。詳しく言えば、「な、」で、おそらく「何」と言いたかった発話を途中で止め、「これ、何？」という質問の仕方にやり直そうとしている。しかし、やり直しを始めた直後に、また「これ、」で発話を止め、「この～って何？」という聞き方にやり直している。そのやり直しの中で、さらに「フェジョア、フェジョアード」という語の修復が起こっているといえる。

【教材会話例①を使ったタスクのつくり】

この会話は、レストランでの会話の聴き取り練習としてつくられている。この課の重要表現は「質問する」、「相手の間違いを指摘する」で、タスクは「スキットを聞いて(1)誰と誰が、(2)何について話しているか、下から選んでください。」というものである。4つあるスキットの2番目になっている。

(1) 誰と誰がの選択肢として「ア.店の人と客 イ.友人同士 ウ.会社の同僚同士」があり、(2) 何についての選択肢として「a.天ぷら b.スパゲッティ c.コーラ d.フェジョアード e.サラダ」がある。(答:イ.友人同士 d.フェジョアード)

タスク(1)の問いの答として「イ.友人同士」を導き出すのは、「～なんだ」「けどさー」「しきー」などのくだけた会話のスタイルがまず重要な情報となろう。

タスク(2)では、まさに「フェジョアード」という答えを導き出す部分で、【教材会話例①】の自己開始修復は行われている。そのことにより、答えに関連する言葉が、繰り返し発話されることになり、強調されている。例えば、以下のような流れも考えられる。

健二:「フェジョアードって何？」

リサ:「豆の料理だよ。」

このように修復がない、ただの「質問」と「答」であれば、フェジョアードは1回しか現れない。しかし、修復が入ることにより、不完全な形の「フェジョア」が1回、完全な形の「フェジョアード」が2回現れることになり、その部分に焦点があたり、聴き取りタスクの答えを導き出すのを容易にしている。

タスクの答えを導き出すこととは直接関係していないが、次のようなことも言える。まず、会話の最初で健二が「俺、ブラジル料理食べるの、今日が初めてなんだ。」と述べることにより既に明白になっているが、さらにこの自己開始修復で、健二がブラジル料理を知らない者で

あることを際立たせて示すことになっている。これは十分予想出来るつながりであり、自然な会話の流れとしてつくられていると考えられる。

また、この課の重要表現である「～って何？」と「質問する」時に、うまく質問を遂行出来ない場合でも、何度もやり直すことで、自分で修復して質問をやり遂げる例にもなっている。つまり、「自己修復しながら質問をやり遂げる」という発話にもつながる機能を、聴き取りの中で提示していると言える。

3.4 他者開始修復例とタスク上の役割

次に、数の多かった他者開始自己修復であるが、トラブルソースの<単純な繰り返し>というシンプルな例が半数を占めた。その中でも工夫されている例をみてみよう。

☆【教材会話例②】

店の人：はい、レストラン・エルベです。

マイヤー：あの、すみません。

店の人：はい。

マイヤー：明日、9時半に面接にうかがうことになっておりますマイヤーですけど。

店の人：はい、うかがっております。

マイヤー：あの、そちらまでの行き方をおたずねしたいんですけど。

店の人：何線をご利用ですか？

→マイヤー：何線？

店の人：あ、ええと…地下鉄ですか、JR ですか？

マイヤー：あ、JR です。

店の人：JR ですと、渋谷が一番近いですね。

マイヤー：渋谷。

店の人：はい。渋谷の南口を出ていただくと、バスターミナルがありますので、バスに乗って駒場というところで降りてください。

→マイヤー：駒場？

店の人：はい。店は駒場のバス停のすぐ前です。

マイヤー：えっと、駅からどのぐらいかかりますか。

店の人：えー、込んでなければ、10分ほどですが、時間帯によりますね。

マイヤー：そうですか。

店の人：朝は込みますので、もしかしたら、歩いていらっしゃるほうがいいかもしれませんね。歩いてだと、20分ぐらいです。

マイヤー：歩いて。はい、わかりました。ありがとうございました。では、明日、うかがいます。
店の人：はい、お待ちしております。

(『日本語生中継 初中級編1』 第8課より)

この会話では、他者開始修復が2度起きている。二つとも修復の開始の方法が同じで、トラブルソースの単純な繰り返しである。

最初は、下線「何線」が、聞き取り、または理解のトラブルの源になっており、波線のトラブルソースを単純に繰り返す方法で、他者により修復が開始されている。二重下線部分で「あ、ええと・・・」と言いよどみながらも具体的な交通機関の名前を提示することで質問をやり直す。トラブルソースを発話した人が自ら修復を行っている。

次に、下線「駒場」が、聞き取り、または理解のトラブルの源になっており、再び波線のトラブルソースを単純に繰り返す方法で、他者により修復が開始されている。二重下線部分で、「はい。」というその聞き取りは正しいという返答をすることで、トラブルソースを発話した人が自ら修復を行い、さらに、店が駒場のバス停のどこにあるかという説明を加えている。

【教材会話例②を使ったタスクのづくり】

この課のテーマは「交通手段」で、このスキット(会話)は聴き取り練習用である。タスクは「スキットを聞いて(1)誰と誰が、(2)何について話しているか、下から選んでください。」である。これは、4つあるスキットの3番目のものである。

(1)誰と誰がの選択肢として「ア.乗客同士 イ.乗客とカウンター係 ウ.同僚同士 エ.店員とその店に行く人」があり、(2)何についての選択肢として「a.バスと電車の比較 b.大阪までの行き方 c.面接場所までの行き方 d.飛行機の便」がある。(答:エ.店員とその店に行く人, c.面接場所までの行き方)

このタスクにおいて、(1)エ.店員とその店に行く人、(2)c.面接場所までの行き方、という答を導き出すのは平易ではなかろう。

(1)の答のためには、会話の最初の方にある「レストラン・エルペ」が店の名前であることを理解すること、また、2番目の修復で使われている、「はい。店は駒場のバス停のすぐ前です。」の「店は」をとらえることが重要になってくる。「店」ということばはここに出てくるだけである。

(2)のためには、やはり会話の最初の方にある「9時半に面接にうかがうことになっております」を聴き取ることが重要である。ここを聴き逃すと何のために話しているかが分かりにくくなる。ただ、「渋谷」「バス」「歩いて」などの単語は、(2)の選択肢であるb.大阪まで

の行き方、d. 飛行機の便 を消去するためのヒントにはなろう。また、交通手段について双方が意味の確認を行い理解に至っているやり取り全体が、場所への行き方を話す会話になっており、そこから類推することも可能であろう。

修復とのからみで、場所への行き方を示している流れを詳細に見てみよう。

まず、最初の修復では、マイヤーの「何線?」という修復の開始を聞き取りだけでなく、理解のトラブルとしてとらえている。なぜなら、店の人は、修復を交通機関の提示による選択疑問文「あ、ええと・・・地下鉄ですか、JRですか?」で行っており、理解のための修復が行われているからである。また、交通手段が明白に提示される仕方が選ばれていることは、場所への行き方を話している会話であることへのヒントにもなっている。

次に、2番目の修復においては、「はい。店は駒場のバス停のすぐ前です。」と、「はい。」というその聞き取りは正しいという返答に続けて「店は」と取り立てた上で「駒場のバス停のすぐ前です」とする。「そう、駒場です。」でも、直前の発話を繰り返す「はい。駒場で降りてください。」でもなく、店の場所を明確にすることを、修復に続けて行っているのである。

ここで問題なのは、マイヤーの「駒場?」が聞き取りのトラブルなのか、理解のトラブルなのかである。この「駒場?」も聞き取りのトラブルだけでなく理解のトラブルでもある可能性があり、「駒場」に対する理解のための修復も期待される。しかしここでは、「はい。」と敢えて聞き取りのトラブルとして修復を終わらせている。そして、その修復の不十分さを補うように「店は駒場のバス停のすぐ前です。」とすぐに続け、「駒場」の説明が「店」との関係で説明されるのである。さらにこれは、最初のマイヤーの質問「あの、そちらまでの行き方をおたずねしたいんですけど。」の答えになっている。つまり、修復によって会話の流れが一旦それる³⁾が、店への行き方を述べるという会話の本流に戻し、同時に、修復の不完全さも補っていると考えられる。

このような微細な修復の解決の仕方でも、会話の主要な流れとのつながりをよりはっきりと示すことが可能である。そして「場所を説明している」という本流を浮かび上がらせることは、タスクを解くためのヒントになり得る。

次に、他者開始修復の開始の方法が単純な繰り返し以外のもの、繰り返しの後に「何それ」など異なる修復のやり方を付け加えたり、「え？」のように、聞き取れなかったこと、理解できなかったことを表したりするなど、いくつかのバリエーションが見られたものを取りあげる。

3) 修復は、会話の基の流れの中に差し挟まれる挿入連鎖である。

☆【教材会話例③】

妹：お姉ちゃん。宿題，ちょっと教えて。

山川：いいわよ。

妹：この写真の人，だれ？

山川：え，知らないの？

妹：うん，私，歴史が苦手だから。

山川：困ったわね。この人はエジソン。

妹：ああ，あの有名な…。

山川：そう，電球を発明した人よ。

妹：そうなんだ。エジソンって，こういう顔だったんだ。初めて知った。

山川：それで，次は…。

妹：この人は知ってる。ピカソ！

山川：違うわよ。ピカソは6番。この人はレオナルド・ダ・ヴィンチでしょ。

妹：ああ，あの「モナリザ」をかいた人ね。

(中略)

妹：ねえねえ，じゃ5番目のこの二人は？

山川：これはキューリー夫妻。

妹：何をした人？

山川：ラジウムを発見した人よ。

→妹：ラジウム？何，それ？

山川：はあ。

妹：まあ，いいか。

(以下省略)

(『J Bridge for beginners Vol.1』 20課より)

ここでは，下線ラジウムがトラブルソースであり，波線部分の他者開始の方法は，単純な繰り返し，疑問詞，指示詞という組み合わせで行われている。ただ，ここでは，修復自体は終了しておらず，修復部分は放棄されている。

【教材会話例③を使ったタスクのつくり】

これは聴解タスクの会話であり，20課の目的の一つは動詞を使って名詞修飾ができることである。動詞タ形による名詞修飾を練習させようとしている。よって網かけの「発明した」「かいた」「した」「発見した」の部分等が空欄になっており，それを聴き取って書かせることがタ

スクとして課されている。省略した部分も含めると、空欄部分は全部で8カ所である。トラブルソースのある「ラジウムを発見した人」は7カ所目の動詞による名詞修飾部である。

何枚も写真を示し次々にその人物は誰なのか考えているにもかかわらず、妹はどれも分からないという会話である。修復も単純には始まらず、修復そのものも放棄されるという流れである。山川は「はあ」と逃げ、妹も修復が放棄されても「まあ、いいか」と受け入れている。

宿題で写真の人物の名前を考えるという設定が功を奏し、ある文型を繰り返し用いることへの抵抗感は少ない。しかし、同じことが繰り返されたり、文型に焦点があたりすぎたりすると、例えば教科書の会話文であったとしても会話の流れを維持するのが難しくなる場合がある。しかしながら、いくつかの開始の仕方では始められた「修復」を入れ込み、さらにそれを放棄させることで、この妹に何を説明してもしょうがないという姉の心情や、もう写真の人物の名前さえ分かればいいという妹の状況をよく表している。

文型を繰り返し練習させたいというタスクの作り手の欲求がある。しかし、不自然になりすぎでは会話として成り立たない。タスク会話の作り手は、少しでも「会話の自然さ」に近づけようと、修復を道具立てとして利用するのではないだろうか。

3.5 自己開始と他者開始が組み合わさる修復例とタスク上の役割

さらに、1, 2例であったが、これまで上げたものより自然な会話に近い、複雑な修復例があった。自己開始と他者開始が組み合わさる修復例である。

☆【教材会話例④】

客：あ、う、すいません。

店員：はい、いらっしゃいませ。

客：あ、う、着物みたいなのを探してるんですが。

店員：あ、着物でございませうか。

→客：あー、いえ、えとー、あれは着物じゃないと思うんだけど。

店員：はあ。

客：あの、温泉に行ったときに、着る…。

店員：あー、浴衣でございませうね。

客：浴衣？

店員：浴衣でしたら、こちらになります。

客：ありがとうございます

(『日本語生中継 初中級編1』 第5課より)

客の下線部分の自己開始で始まった修復は、店員の二重下線「あー、浴衣でございますね」で一旦他者修復が行われる。しかしながら、修復は解決に至らず、「浴衣」が再び理解/聞き取りのトラブルソースになり、波線部分、店員に対する客の他者開始につながっている。その後も修復は明確にはなされないが、品物の提示により客に理解されていることは明らかである。つまり、終結部分を実物を提示することで行い、「あのう、着物みたいなのを探してるんですが。」という客の依頼という行為（action）に対して、依頼の物を差し出すという行為も同時に行っている例である。

【教材会話例④を使ったタスクのづくり】

第5課は「買い物」をテーマとしており、聴き取り練習のモデル会話である。「スキットを聞いて（1）誰と誰が、（2）どこで話しているか、下から選んでください。」とあり、4つのスキットの中の1番目である。

（1）誰と誰がの選択肢として「ア.友人同士 イ.会社の同僚同士 ウ.客と店員」があり、（2）どこでの選択肢として「a.本屋 b.デパート c.免税店 d.電気屋」がある。（答:ウ.客と店員, b.デパート）

（1）のタスクでは、最初の「いらっしゃいませ」「あのう、着物みたいなのを探しているんですが」が聴き取れば、「ウ.客と店員」という答えを導き出すのは容易である。また（2）のタスクでは、「着物みたいなのを」売っているのは選択肢の中では、b.デパートであろう。免税店の可能性もあるが、次の2番目のスキットで明らかな免税店の会話が出てくるため、その時点で消去出来るだろう。

修復のされ方でも、（1）の答えである「ウ.客と店員のやりとり」であることが示されている。客の自己開始修復を途中で遮り、「あー、浴衣でございますね」と他者修復ができるのは、そのことに対して知識を持っている、あるいは積極的にサービスをすることを求められている店員としての立場ゆえだと考えられる。また、「浴衣？」と聞き返す客に対して、浴衣の説明を加えるのではなく、実物を見せることで一気に修復を解決に持っていく。これは、他者開始修復に対して、修復をきちんと終了させ、相互に理解することを怠っているのではなく、店員として、客の「あのう、着物みたいなのを探してるんですが。」という最初の要求に、求める品物を早く差し出すことで応えている。修復の仕方からも、店員としての役割から、理解をより早く示し、求められているものを差し出すサービスを行っていることが浮かび上がっている。

4. 考察一「修復」のタスク内での役割と今後の方向性一

日本語教科書における修復がどのような役割を果たしているか例を挙げて見てきたが、タス

ク内で修復にどのような役割があるのかをまとめる。

まず、会話の中で修復がどんな意味を持ち、役割を果たしているかである。

- 1) 【教材会話例①】のように、「な、これ、このフェジョア、フェジョアーダって何？」とあると、例えばその人物がブラジル料理を知らない者であることが際立ってくることもある。修復は微細なプロセスかもしれないが、話す人物のその場での状況をとらえる道具立てになり得る。
- 2) 【教材会話例②】のように、修復から元々の流れへの戻し方で、会話の主要な流れとのつながりをよりはっきりさせることもできる。
- 3) 複雑な修復が起こっていた【教材会話例④】のように、その場面での役割として会話が起きていることを浮かび上がらせ、場面の理解を深めることもできる。

このように、より自然な会話に聞こえるということを詳らかに見てみると、修復の仕方にも学習者に必要な情報が含まれていることが分かる。

また、タスクの作り手としての視点からは、以下のような修復の利用の仕方があることが見えてきた。

- 4) 【教材会話例①】のように、タスクの答の部分に修復を入れることで、キーワードを繰り返し聴かせることができる。
- 5) 【教材会話例③】のように、言語学習タスクとしての性格から起こりがちな、繰り返し同じ文型が使用される会話に、その不自然さを薄める道具立てとして使われることも可能である。

修復はタスクの中で一定の役割を担い得る。修復を日本語教科書の中でどのように扱うべきか、今後の方向性についてもまとめる。

- i) 本調査では、自己開始自己修復が【教材会話例①】 1例しか見られないことは、注意すべきである。特に初級聴解教材において完全な発話のみを聴かせるのが、これまでの伝統的な方法であったと言えるが、実際の自然会話においては、話し手による言いよみや言い直しなどが頻繁に起こることが観察されている。この自己開始自己修復を教材の中でさらに数多く存在させてもいいのではないだろうか。
- ii) 他者開始の方法が、単純な繰り返しが半数を占めたのは、日本語学習者が一番単純端的にトラブルソースの在り処を示す方法であるからだろうが、偏重する傾向があるようにも見受けられる。豊かなバリエーションを提示することが望ましい。

iii) 場面に依存した自然な会話に近いものをつくるためには、修復に関してもさらなる複雑さを示すが必要になってくる場合がある。

最後に、本研究で収集した、実際の自然会話の修復例を1例ではあるが示す。

①【実際の会話に現れる修復例】⁴⁾

HがIに、中国語の勉強をKに助けてもらっていることを話した後

I: ああ :: ああ :: ああ :: そうか .

中国語 [の (勉強)

K: [ま今中国語 ど ⁵⁾

→H: °うん [ん?

→K: [ど (.) ど (.) ちゅうごうご . (.) シャベる h?

¥シャベれる ?¥ .hh

H: ↓ さ :::: ha ha ha .hh

ここでは、Kの「ど」がトラブル源となり、H、つまり他者による修復が「ん？」で開始されているように見える。しかし、実はKは「ど」「ど」「ど」と「どう」を3回繰り返し、自己修復を開始しているようにも見える。つまり、ここでは、Kによる自己開始と、Hによる他者開始がほぼ同時に開始していると言える。また、Kは、「シャベる」を「シャベれる？」に言い直しているが、ここも自己開始自己修復している。つまり、「ど」を繰り返したり、「ど」を「シャベる」「シャベれる」に置き換えたりと様々なやり方で自己開始修復を行っている。単に言い間違いを置き換えているだけでない。結果的にHはKの「ど」が「Kの中国語はどうか」という質問であることを理解し、「さ::::」と答えている。

このように実際の会話例では、単純な他者開始修復に見えるやり取りも、実はより複雑な現象であることが多く観察される。

また、Kは修復を笑いながら終了させているが、それはHに中国語を教えたことのあるKの「中国語シャベれる？」というからかいにもなっており、Hは「さ::::」と冗談のように返している。この2人が近い関係であることを窺わせる流れにもなっている。

4) 本データは日本語学習者1人を含む3人の会話を録画し、文字化したものである。使用されている記号については西阪・串田・熊谷(2008)を参考のこと。

5) 03, 06行目、学習者Kの発話「ど」は「どう」であろう。

学習者は現実のコミュニケーションにおいて、日本語教科書で扱われる以上の複雑な修復プロセスの必要性に直面するのである。初級であったとしても、自分の発話上のトラブル、また相手からの修復開始にうまく対処していくためには、特に聴解練習に実際の会話に観察されるような豊富な修復のやり取りをより多く取り入れる必要があるだろう。

-
- (1) 本研究は、平成 23 年度から科学研究費補助金（研究種目：挑戦的萌芽研究 課題番号：23652115 研究課題名：「日本語非母語話者会話における修復とその相互行為的意味－日本語学習への応用に向けて－」 研究代表者：初鹿野阿れ 研究分担者：山崎けい子）の助成を受けている。
 - (2) 本稿は、初鹿野阿れ・山崎けい子（2001）（2011 世界日本語教育大会（天津外国語大学）口頭発表「日本語教科書における『修復』の扱われ方－会話・聴解教材を中心に－」）の内容を発展させたものである。
 - (3) 初鹿野阿れ（名古屋大学 国際交流協力推進本部）

参考文献

- 西阪仰・串田秀也・熊谷智子（2008）. 特集「相互行為における言語使用：会話データを用いた研究」について 社会言語科学, 10 (2), 13-15
- Schegloff, E.A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53 (2), 361-382

日本語教科書

- 小山悟（2007）『J.BRIGE for Beginners Vol.1』凡人社
- ボイクマン総子・宮谷敦美・小室リー郁子（2003）『日本語生中継・初中級編 1』くろしお出版
- ボイクマン総子・宮谷敦美・小室リー郁子（2006）『日本語生中継・初中級編 2』くろしお出版